様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３６０００１

研究課題名（和文）ペンテコステ派とパール行商ーサマが経験する21世紀の仕事と祈り

研究課題名（英文）Livelihood and Religious Practice: The Case of the Sama Dilaut in Davao in the 21st Century

研究代表者
青山　和佳（Aoyama, Waka）

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：９０３３４２１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、当初フィリピンのダバオ市のサマ（バジャウ）移民を事例に、都市経済への参加浸透とペンテコステ派キリスト教の受容が同時期に進行したことに注目し、人びとが信仰と仕事という２軸のもとにいかに社会生活を再生産しているのか明らかにしようとした。しかし、まさにプロジェクト開始年度４月に調査地が火災で全焼したため、その枠組みを大きく変更し、つぎのことを追究した。１）火災後の復興プロセス（調査地再建、生業と信仰）、２）火災以前に収集した口述生活史を住民とともに振り返ること。その結果、これらのサマ移民の暮らしは「マイノリティとして承認されていく」社会的過程としてみなすことが可能であるという仮説に達した。

研究成果の概要（英文）：This research project was initially designed to explore the livelihood of the Sama-Bajau migrants in Davao City, Philippines, particularly focusing on their recent participation in the urban market as vendors and their recent acceptance of Pentecostal Christianity. However, as the research site burnt down in April 2014 just before this research project began, we had to reframe the project, and eventually carried out the two researches as follows: 1) recording the process in which the Sama-Bajau rebuilt their communities in new sites, paying special attention to their economic and religious activities; 2) collaborating with the people to verify, retell and update the oral life histories that we had collected since the late 1990s. Although details have yet to be studied, the data collected show that their life in Davao City for the past two decades could be considered as a social process in which "they have come to be recognized as minority" in the larger society.

研究分野：地域研究（東南アジア）

キーワード：東南アジア　フィリピン　生業　信仰　キリスト教　ペンテコステ派　サマ　都市

１．研究開始当初の背景

本研究の着想における学術的背景として、(1)東南アジアの経済発展と宗教再興に関する研究、(2)フィリピンにおける「繁栄の宗教」の研究、(3) 申請者青山のミンダナオ島、ダバオ市のサマ・バジャウ社会の民族誌的研究が上げられる。

２．研究の目的

東南アジアでは経済発展が続くとともに、宗教の復興が指摘されている。とくに貧困層に浸透したタイプの宗教は、日常生活における繁栄・成功の追求を肯定する傾向がある。一方、貧困層の生活実態を分析し、その生活の質を向上することを目的とした開発研究では、経済発展に伴う住民の価値観の変化を前提としつつも、それを宗教のような非市場的活動と関連づけて明示的に論じることは稀であった。そのため、住民自身の主体的動因や地域的文脈の考察が現実から離れてしまう場合があった。本研究は、フィリピンのミンダナオ島ダバオ市のサマ（バジャウ）移民を事例に、都市経済への参加浸透とペンテコステ派キリスト教の受容が同時期に進行したことに注目し、人びとが信仰と仕事という２軸のもとにいかに社会生活を再生産しているのか明らかにしようとした。これにより、経済発展と文化（規範、信念、価値観等）の相互関係を考えるための枠組とデータを提供することを目指した。

３．研究の方法

本研究は定点観測で収集してきた一次資料をフィールド調査により発展的に最新化し、二次資料と合わせて分析を実施する民族誌的研究である。そのため、現地調査を中心としたつぎのような４年間の研究計画を採用した。

ただし、以下の「4．研究成果」で述べるように、本研究課題実施初年度のしかも４月時点で従来の調査地が火災で全焼するという予想外の事態が生じた。そのため、本研究の実施にあたってはその当初の問題意識・目的・課題を念頭に置きながら、調査地の人びとの火災からの復興状況に寄り添って調整しつづける形で進行させる研究方法を採ることとなった。

４．研究成果

上述した通り、当初は火災の衝撃のため、本研究プロジェクトの実施そのものが不可能ではないかと思われた。しかし、実際には、過去に収集した民族誌的資料、とくに口述生活史を「現時点から振り返る」という興味ふかい研究実践を行うことができた。その結果、「宗教と経済」（ペンテコステ派キリスト教とパール行商）という側面だけではなく、物理的な生活空間を調査地の人びとがどのように日々作り出し、ときに壊し、また新たに作り出しているのかという過程をより長期的な観点（1997 年ごろから現在まで）でとらえるための一次資料を収集することができた。本プロジェクト実施期間を通じて、予備的考察を雑誌論文ないしは学会報告で公開してきたが、本格的なとりまとめはこれからおよそ 2 年をかけておこない、「（国民国家の枠組み、あるいはダバオ市というローカルな枠組みで）マイノリティとして承認されていく社会的な過程」に焦点をあて、研究方法論として「親密さ」(intimacy)をひとつのキーワードとした図書として英語で出版される見込みである（東京大学東洋文化研究所叢刊＋京都大学学術出版会）。

以下、実施年度に沿って研究成果を列挙する。

(1) 平成26年度

フィールドワークを実施するための準備として、つぎの三点を行った。第一点は、米国留学中（平成26年８月末迄）の期間中に収集したジャーナル論文も含め、アジアの宗教と経済に関する人類学および社会学の文献を収集し、その読み込みを行ったことである。帰国後、本科研予算により追加的に文献を購入した。このサーベイの成果の一部は、留学先であったHarvard-Yenching Institute のワーキングペーパーとして発表した（以下項目５の雑誌論文⑨)。

第二点は、下記「現在までの達成度」に記すように、平成26年４月にフィリピン、ダバオ市の調査地を襲った火事のあと、科研予算を使うのが妥当か事前には判断がつかなかったため、勤務先大学の個人研究費で緊急に渡航し、10日間ほど火災後のコ

ミュニティを訪問し、状況の視察と記録をしたことである。この予備的な成果をとりまとめ、のち平成28年11月12日～14日にフィリピン国立博物館で開催されたICOPHIL で報告した(同・学会報告②)。また、結果的には、火災後の調査地ではキリスト教宣教団体、教会、および教会指導者（牧師など）が大きな役割を果たしていることがわかったため、次年度以降、本科研プロジェクトの枠組みにおいて追跡調査を試みる予定である。第三点は、もともと本年度もふくめて複数年のフィールドワークにより、当事者からフィードバックをえることを計画していた、複数の家族から過去に収集したライフヒストリーについて、英語への翻訳を進めたことがある。 れはだいたい６章相当であるが、平成26年度内にそのうち３章を訳し終え、翌年度以降、順次発表した(以下項目５の雑誌論文④⑤⑥)

(2) 平成27年度

つぎの三点を実施した。第一点は、昨年度読み込んだ、アジアの宗教（とくにペンテコステ派キリスト教）と経済にかんする人類学、社会学、社会経済学などの文献をふまえて、本研究の分析フレームワークの構想を英語論文にまとめ、国際学会SEASIAで報告した（同・学会報告③） これを踏まえ、その後、フルペーパーとしてまとめた論考も発表した(同・雑誌論文⑦)。

第二点は、前掲のSEASIAでの アブストラクトが評価され、当国際研究会議主催者のひとりであるProf. Michael Feener (当時 National University of Singapore, 現在はOxford University) から、NUSのAsia Research Institute (ARI)のReligion and Globalization Clusterのメンバーに紹介され、アジアにおける宗教と経済、宗教と開発をめぐる状況について議論できたことである。

以上の二点により、第三点としておこなった、本研究のコアであるフィールドワーク（2016年3月11日～ 同3月31日）において、当初筆者が想定していたよりもより豊かな視点から、フィリピンのダバオ市のサマ人のペンテコステ派キリスト教の信仰実践およびパール行商を含む生業活動について多くの事実発見を行うことができた。この時期はとくに火災後、新たな調査地に移住した際に、火災以前から存在したコミュニティ内の潜在的指導者がそれぞれ独立し、別個の教会を構えて分散したことが重要である。その実践を支えた資源が外部からの援助ばかりではなく、内部の一般信徒による支え合いもあったことを確認した。

(3) 平成28年度

つぎの三点を実施した。第一点として、現地調査を2回実施した。まず、2016年4月25日～同5月12日において、フィリピン・ダバオ市のサマ人居住区において「聖週間」および大統領選挙の参与観察を行うとともに、いくつかの政府機関に情報開示を要請した。つづいて、11月16日～同20日に再訪し、前回調査のフォローアップとともに要請していた情報開示の結果を回収した。あわせて、マクロ経済指標の収集に関して 、 Joint-Ateneo Institute for Mindanao Economy (JAIME)の所長であるGermelino Bautista教授より助言を受けた。

第二点として、これまでの成果について、口頭報告２回 、執筆2本、翻訳（共同）１冊を行なった。前者は、世界からフィリピン研究者が集う国際会議ICOPHIL、および、２）Harvard-U Tokyo Conferenceで報告(同・学会報告①)、後者としては国内学会からの招待論文、モノグラフ各１本(同・雑誌論文③⑧)を発表した。また生業の分析に先立ち、London School of Economicsの Naila Kabeer教授の代表作*Power to Choose*の共同翻訳を行い、出版した(同・図書②)。

第三点として、映像制作を導入した。本プロジェクト申請時の予定にはなかったものの、本プロジェクトの核をなす現地調査を実施していくなかで、調査対象であり、また協力者であるサマ人の住民との相互作用により、生まれてきたひとつの記録方法であり、協働・対話の方法である。

(4) 平成29年度

最終年度は、つぎの三点を実施した。第一点として、現地調査を２回実施した。まず、2017年5月1日～同年5月11日、フィリピン・ダバオ市を訪問し、フォ

ローアップ調査を実施した。多くの時間を調査助手とともにこれまで収集したビジュアル資料を整理しつつ、リフレクションすることに費やした。また、現地の 所長Bautista教授から研究成果のまとめ方について助言を受けた。つぎに、2017年の11月16日～同年11月28日に同地に戻り、主たる調査対象である５つの家族及びその第二世代以降を訪問し、ビジュアル資料の使用について相談した

第二点として、これまでの成果について、次のような発信を行った。１）NUS-ARIでの口頭報告(同・その他①)。２）ペーパー執筆２本：日本語既発表のライフヒストリーを現地で内容確認しつつ、関係者（出版系含む）の許可のもと、ワーキングペーパーとして１本公表した（同・雑誌論文②）。ほかに、ダバオのサマと平取町のアイヌにかんする学術エッセイを統計研究会からの依頼で執筆した(同・その他②)。３）共著書出版１冊：本プロジェクトの成果を反映させて、開発援助学の教科書の第二版を出版した（同・図書①）。

第三点として、思わぬ成果であったが、重要でこの先につながる成果として、調査地住民におけるビジュアル＆オーラル資料をめぐるコラボレーションの可能性を見出したことであった。昨年度の報告書に映像制作を導入したことを記したが、それはあくまでも「現在」を記録していくものであった。 1990年代末から蓄積している写真等の資料をめぐるストーリーテリングが可能であることがわかってきたため、これを将来の研究プロジェクトにつなげていくつもりである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　9　件）

① Aoyama, Waka. 2018 (printing). “To Become Christian Bajau”: The Sama Dilaut’s Conversion to Pentecostal Christianity in Davao City, Philippines, 1997-2005.” *Filipinas Journal of the Philippine Studies Association.* 1 (September). 印刷中、掲載頁未定、査読あり。

② Aoyama, Waka. 2018. “Living in the City as Sama-Bajau: The Case of Magsahaya’s Family.” Harvard-Yenching Institute Working Paper Series. 5 Mar., 2018. https://harvard-yenching.org/features/hyi-working-paper-series-aoyama-waka-5. pp. 1-46. 査読なし。

③ 青山和佳. 2017.「火災と教会— ダバオ市の海サマ人の生活空間の変容と持続」『アジア文化研究所研究年報』東洋大学、pp. 281-288. 査読なし。

④ Aoyama, Waka. 2017. “Living in the City as Sama-Bajau: The Case of Kaluman’s Family.” Harvard-Yenching Institute Working Paper Series. 12 Apr., 2017. https://harvard-yenching.org/features/hyi-working-paper-series-aoyama-waka-4. pp. 1-39. 査読なし。

⑤ Aoyama, Waka. 2017. "Living a New Life as 'Christian Bajau'?" Harvard-Yenching Institute Working Paper Series. 5 Jan., 2017. https://harvard-yenching.org/features/hyi-working-paper-series-aoyama-waka-3. pp. 1-39. 査読なし。

⑥ Aoyama, Waka. 2017. “Living in the City as Sama-Bajau: The Case of Papa Melcito’s Family.” Harvard-Yenching Institute Working Paper Series. May, 2016. https://harvard-yenching.org/features/hyi-working-paper-series-aoyama-waka-2 pp. 1-45. 査読なし。

⑦ Aoyama, Waka. 2016. "Creating Living Space against Social Exclusions: The Experience of the Sama-Bajau migrants in Davao City, Philippines." *Harvard-Yenching Institute Working Paper Series.* January, 2016. https://harvard-yenching.org/features/hyi-working-paper-series-aoyama-waka-0 pp. 1-43. 査読なし。

⑧ 青山和佳. 2016.「交易と現地社会の再編ースールー王国における

民族間階層の構築と現代を生きる海サマ人」 『中国ー社会と文化』 第 31 巻 中国社会文化学会 pp. 60-78. 査読あり。

⑨ Aoyama, Waka. 2014. "To Become 'Christian Bajau': The Sama Dilaut's Conversion to Pentecostal Christianity in Davao City, Philippines. "*Harvard-Yenching Institute Working Paper Series*. December 2014. https://harvard-yenching.org/features/hyi-working-paper-series-aoyama-waka （March 2016, paper removed. 下記の学会報告②のため）査読なし。

〔学会発表〕（計 4 件）

① Aoyama, Waka. 2017."On Personal Names: How Can We Respond to People Who Are Stigmatized?" Presented at the Harvard-U Tokyo Conference at Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo, held on January 10-13, 2017.

② Aoyama, Waka. 2016."To Become 'Christian Bajau'": The Sama Dilaut's Conversion to Pentecostal Christianity in Davao City, Philippines. Presented at the 10th ICOPHIL Conference at Siliman University, Dumaguete City, Philippines, held on July 6-8, 2016.

③ Aoyama, Waka. 2015. "Creating Living Space against Social Exclusions: The Experience of the Sama-Bajau in the Urban Philippines." Presented at the SEASIA Conference at Kyoto International Conference Center, held on December 12-13, 2015.

④ 青山和佳. 2015.「交易と現地社会の再編—スルー王国における民族階層の構築」中国社会文化学会、於：東京大学文学部、2015 年 7 月 12 日。招待報告。

その他、口頭報告１件、エッセイ１件

① Aoyama, Waka. 2018. "To Become 'Christian Bajau' : The Sama Dilaut's Conversion to Pentecostal Christianity in Davao City, Philippines, 1997-2005, " presented at a seminar entitled "Religionization at Margins in Insular Southeast Asia: Introducing Recent Southeast Asian Studies in Japan" at Asian Research Center (ARI) at National University of Singapore (NUS), held on March 20, 2018.

② 青山和佳. 2017.「共感の土台を求めて：平取町とダバオ市で生活世界に招き入れてもらう」『学際』第４号、統計研究会、pp. 105-112.

〔図書〕（計 2 件）

① 青山和佳・受田宏之・小林誉明編著．2017．『開発援助がつくる社会生活—現場からのプロジェクト診断(第 2 版）』岡山市：大学教育出版．242 頁．

② ナイラ・カビール著，遠藤環・青山和佳・韓載香訳．2016．『選択の力–バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』 東京：ハーベスト社．436 頁．

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者　　青山和佳
（ AOYAMA, Waka　　）
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：90334218

(2)研究分担者　　該当なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者　該当なし
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者　該当なし
（　　）

以上